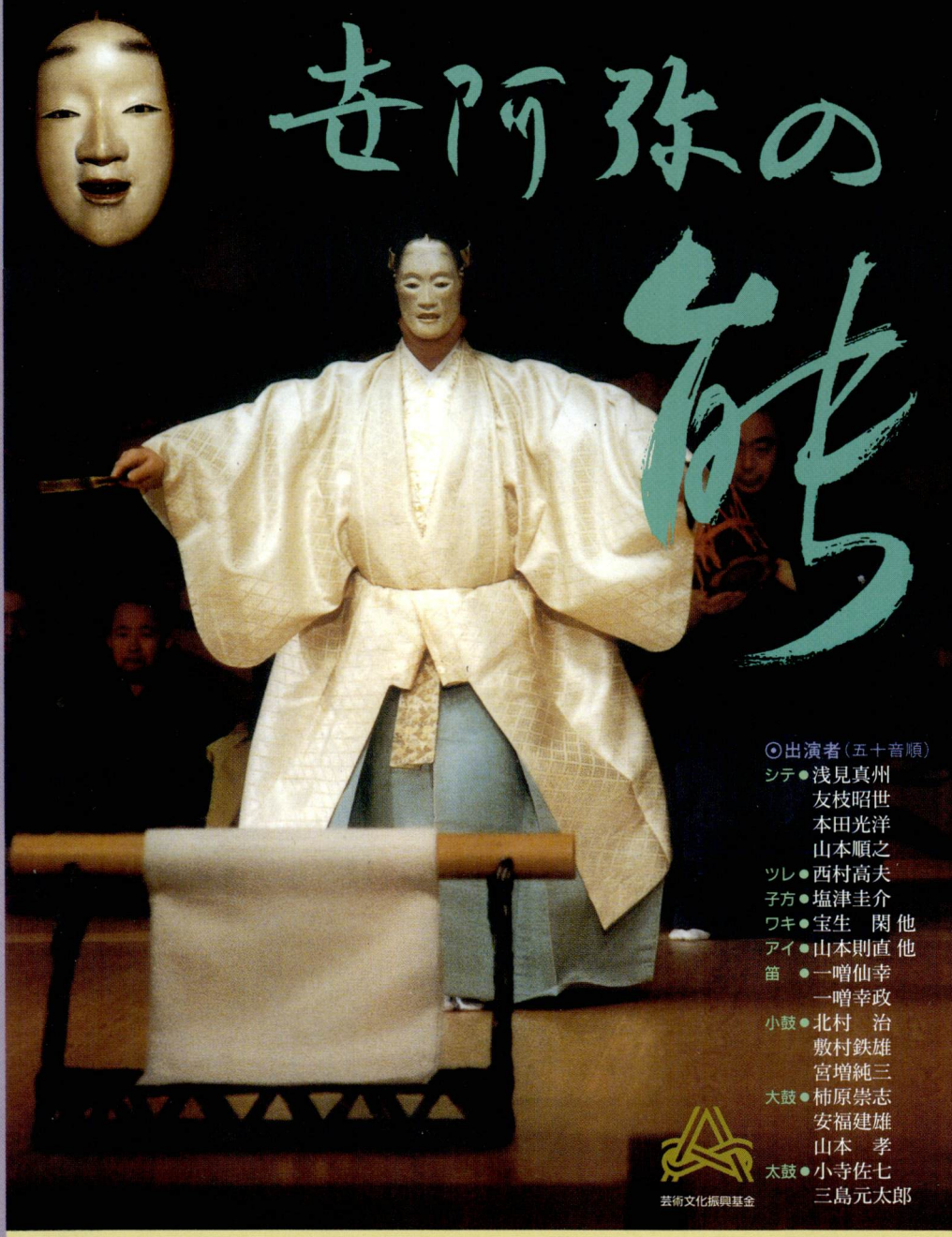
世阿弥の砧

文部省特選
日本映画ペンクラブ推薦
教育映画祭最優秀作品賞
文部大臣賞
毎日映画コンクール記録文化映画賞
キネマ旬報ベスト・テン第一位
優秀映画鑑賞会特別推薦

⊙企画
(財)ポーラ伝統文化振興財団
⊙製作
(株)桜映画社
⊙協力
芸術文化振興基金
国際交流基金
⊙監修・指導
東京国立文化財研究所
名誉研究員
横道萬里雄
法政大学能楽研究所所長
表　章
文化庁主任文化財調査官
高橋秀雄
能楽プロデューサー
荻原達子
⊙撮影協力
観世宗家
国立能楽堂
銕仙会
法政大学能楽研究所
三井文庫
春日大社
宝山寺
天河大辨財天社
補巌寺　他

⊙規格
16ミリ・カラー・49分
⊙販売価格(消費税別)
16ミリ/300,000円



⊙出演者(五十音順)
シテ●浅見真州
友枝昭世
本田光洋
山本順之
ツレ●西村高夫
子方●塩津圭介
ワキ●宝生　閑　他
アイ●山本則直　他
笛　●一噌仙幸
一噌幸政
小鼓●北村　治
敷村鉄雄
宮増純三
大鼓●柿原崇志
安福建雄
山本　孝
太鼓●小寺佐七
三島元太郎

⊙――監修のことば

横道萬里雄

『世阿弥の能』というこの映画の題名には、二つの意図が含まれていたように思われる。一つは能の歴史における世阿弥の位置を映像化することであり、もう一つは世阿弥の能作品の特色を紹介することである。一冊の本にもなるこの課題を、五十分足らずの小編映画に収めるのは至難の業だが、スタッフ諸氏の必死の努力で完成に漕ぎつけることができた。前記の二つめの目的のためには、世阿弥の代表作四編と、対照のための観阿弥作一編を取り上げたわけだが、いずれもその主題を描く上でもっともふさわしい方々に、囃子方を含めて出演してもらうことができたので、一段と成果があがったと考えている。

せりふ劇的な観阿弥の『自然居士』では、作者が能への摂取を試みたとされる「曲舞」の部分を付け加える形にした。世阿弥の『砧』は、前半が現在能で後半が夢幻能という構想で恋の妄執を描く。作者の自信作なので、たっぷりと鑑賞できるように配慮した。『井筒』は、幽玄な女能の代表作で、夫の形見の衣裳姿を井戸に映す場面がクライマックスとなる後場を取り上げた。冒頭の『清経』は、笛の音に誘われて登場する「恋之音取」の部分とした。現在ふつうには演じない部分だが、これが作者の本来の意図に合致した形かもしれない。また舞踊の面白さを見せる『融』では、「笏之舞」の演出による流麗な盤渉急之舞で、この映画を締めくくった。

上/能『砧』(後場)　妻の亡霊が、夫への怨みと恋しさをはげしく訴える　上左/女面「孫次郎」
下/世阿弥自筆の能本「江口」

⊙配給

能『砧』(前場)　在京の夫を恋い慕い、恨みつつ舞う芦屋の何某の妻

能『井筒』(序ノ舞)　業平の形見の衣をまとう井筒の女

⊙――『世阿弥の能』を監修して　表　章

世阿弥の映画製作の企画に協力することになった直後に、桜映画社が先年製作して好評だった『利休の茶』を見せてもらった。利休には、ゆかりの茶碗・茶室など、映像として楽しめる素材が豊富である。世阿弥にはそれが乏しい。彼が使用したことの確かな能面はほとんどないし、もともと消耗品の能装束も皆無である。当時の能舞台も伝存していない。残っているのは、能本・伝書・書状など、映像としては地味な文書ばかりである。ただ、世阿弥が作った能はほぼ昔の台本どおりに今も演じられているし、それは映像化するにふさわしい素材でもある。世阿弥を主題とする映画が『世阿弥の能』と題される形に結実したのは、自然ななりゆきだったろう。

とは言え、世阿弥の生涯とその業績を映像を通して知ってもらうには、彼の自筆の文書やゆかりの土地の風景を、なるべく豊富に採り入れることが望ましい。そのことが彼の能の特質の把握にも役立つはずである。私は主としてその面で協力した。さいわい、宝山寺や観世宗家を初めとする世阿弥関係資料の所蔵者各位から全面的な協力が得られ、希望した品はほとんどすべて撮影を許された。その大半が映像に生かされてもいる。お蔭で、世阿弥の伝記としてもかなり内容豊富な映画になったように思う。

⊙――あらすじ

日本の古典演劇である「能」の基本を確立し、現代にもなお発展し続けるほど「能」の生命力を高めたのが、世阿弥元清(もときよ)である。

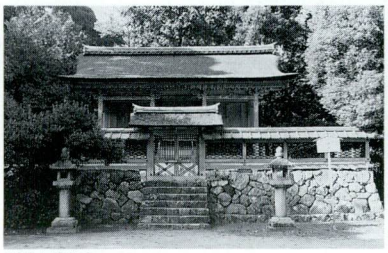
世阿弥は南北朝時代の中頃、14世紀の半ばに大和に生まれた。結崎(ゆうざき)の地を本拠とする猿楽の一座を率いて活躍していた父の観阿弥は、京洛の醍醐寺での演能で名を挙げ、その名声を伝え聞いた将軍足利義満は、観世父子の能を親しく見物した。以来、義満は若い世阿弥を寵愛し、絶大な支援を与えるようになった。

やがて、古典の教養を身につけた世阿弥は、王朝に題材をとった能の名作を次々と書く。猿楽や田楽などから発達してきた能の世界で、第一人者となった父観阿弥の能を、さらに世阿弥が「夢幻能」と呼ばれる歌舞中心の能へと洗練し、完成していった。

夢幻能とは、いまはこの世にいない人物が立ち現れて、在りし日の思い出を物語り、昔を懐かしんで舞を舞い、また闇の世界に消えていくという形式である。この夢幻能を完成させたことが、劇作家としての世阿弥の最大の業績といえよう。

義満の庇護のもと、栄光を極めた世阿弥も、恵まれた時期はそう長くなかった。ことに晩年は悲運が重なった。彼は苦境の中で、俳優として、あるいは能の作者として、また観世座の大夫として、能を論じた『風姿花伝』をはじめとするたくさんの伝書を残している。

この映画では、能の生い立ちを語り、世阿弥の生涯と足跡をたどるとともに、観阿弥作の『自然居士』、世阿弥作の『清経』『井筒』『融』、そして晩年の傑作『砧』と、世阿弥の能の世界をじっくりと鑑賞する。



醍醐寺清滝宮

鹿苑寺(金閣)

多武峰(とうのみね)談山神社

⊙製作スタッフ

製　作＝村山和雄　福間順子
脚本・演出＝村山正実
撮　影＝西山東男
応援撮影＝八木義順　山屋恵司
照明＝本橋俊男
編集＝吉田栄子
選曲＝山崎　宏
語り＝加賀美幸子　観世栄夫
題字＝小松茂美

⊙製作――株式会社 桜映画社　〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル6階　TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666